

「女性作家という生き方」

ゲスト：小勝禮子（美術史、美術批評）

須恵 わたしは2003年に女子美術大の大学院を修了して、2004年に初個展を開きました。

小勝 子どもの頃から絵を描くのが好きだったんですか？

須恵 物心ついた頃から好きでした。工作の方が好きでしたが。

小勝 日本画を選んだきっかけは？

須恵 高校生のときは油絵を描いていて、予備校で日本画体験をしたときに、お皿で絵具を溶くのが新鮮で。絵具がきれいっていう話をしたら、上野の日本画の画材屋さんに見に行ったらどうかと言われて、それで見に行き、もう、わたし日本画に行くって思ってしまった。

小勝 岩絵具がグラデーションのように並んでいると、たしかにすごくきれいですよね。

須恵 心は油絵の精神というか、古典的な日本画というタイプではなかったんですけど、絵具瓶がならんでいるのを見て、一目惚れ。日本画を受験することになりました。

小勝 女子美は、特定の先生につかないそうですね。

須恵 東京藝大とかは、大学院に行くって研究室を選ぶんですけど、女子美の大学院は4名の教授と2名の名誉教授全員に毎回批評をしていただくんです。

小勝 盛り上げる絵を描く先生はいらっしゃる？

須恵 当時の女子美の日本画の先生は……わたしのように盛り上げてないです（笑）。現代的な絵を描かれる先生もいらっしやいましたけど、今のわたしのように大きく盛り上げる先生はいらっしゃらなかったですね。

小勝 須恵さんの絵は、非常に美しいブルーの色彩が目を引きますが、もうひとつ、盛り上がる画面の絵肌が特徴だと思います。それは初個展のときから？

須恵 その前からです。大学1、2年のときは絵具の基礎的な扱い方を教えていただくんですけど、そのあとは表現に関しては自由というか。現代的な先生も非常勤でいらして……うーん、いつからですかね。学部的时候は、杉の板を簀子状にして、泥絵具と石膏を塗って下地にして、削って、という作業をしていたんです。大学院に行くと粒子の粗い砂を使い始めて。

小勝 どういうところで売っているんですか？

須恵 ハンズで売ってたりとか（笑）。「北米大陸の砂」とか、何とかの砂シリーズというのがあるんです。

小勝 自分で採取されることはなかったんですか？

須恵 あります、あります。女子美術大学の日本画研究室の特徴として、岩絵具について研究されている橋本弘安先生がいらして、粉碎機で岩を砕いて絵具を作るんです。

小勝 須恵さんは創画会に所属されていますが、なぜ創画展に応募されるようになったんですか？

須恵 2005年が最初なんですけど、女子美の先生が出品されていて。その頃、内田あぐりさんとか強烈な先生方がいらっしやったので、わたしも出してみたいと思いました。最初に創画展に入選したのは根っここの絵です。女子美の近くに、公園を掘り返して根っこがいっぱい出た場所があったんです。それを捨てるというので、工事の人に根っこをいただいてきて窓に並べて。踊っているみたいで面白いなと思って。

小勝 根っこは、生命の根幹のイメージですか？

須恵 はい。人間の生命のイメージも重なっています。

小勝 出産されてから、作品のサイズが変わりましたか？

須恵 2007年に出産をして、ちょっと小さく……大きい絵を描いても落選したりとか、いろいろあったんです。子育てしながらというのは厳しくて。産後3か月くらいで義母に子どもを預けて、150号の絵を描いたんですけど、創画展に入らなくて。作品も思うようにできず、時間もとれず、子どもに眼の病気も

見つかったりしたんで、これは両方やっていくのは無理というか、両方だめになるなと思って、やむなく休止しました。

小勝 再び描くのは、お子さんが幼稚園に入ってから？

須恵 もう少し前、2010年くらいから大きいものも描きはじめていましたね。

小勝 創画展には出していたんですか？

須恵 春は出していて、秋は出しても落ちたりとか、厳しい時代でした。2011年から2012年にかけて、義母が病気になって亡くなり、以前から闘病していた母が亡くなりました。その後、2013年に久高島へ行って、青い絵を描きはじめました。

小勝 それはやっぱり、久高島には神が宿するという話をお聞きになったり、美しい沖縄の海に心を惹かれたとか？

須恵 きっかけは母親を失くして、実家の手伝いに行っているうちに、肩や頭が凝り固まって、南の島に行けば解放されるんじゃないかと思ったんです。それで久高島に嫁いだ友人に誘われて、最初は神の島なんて知らなかったんですけど。海を見ていたら肩の重みが海に吸い込まれるように消えて、あ、お母さん下りたかも、と救われた気がして。その後に島の話聞いて、わたしがここに来たのもきっと意味があったのだらうと思いました。海の深い部分と、自分の心の奥が繋がったようになったので、この感覚を残しておこうと思って描いたんです。

小勝 身近な心の支えであった人を失くした体験が大きかったんでしょうね。

須恵 そうですね。それまで青い絵具を使ってなかったんです。青は難しい色という先入観があったんですけど、沖縄のブルーは特別で。一枚描いたら満足かなと思ったんですけど、今まで続くとは思わなかったです。

小勝 その青の中で盛り上がっている部分があるのが、須恵さんの絵の大きな特徴だと思いますが。

須恵 海の底のような「神の島より」のシリーズは、粒子の粗い砂を泥絵具と混ぜてベタッと乗せた後に紙を湿らせてぐしゃぐしゃとして貼り込んで、そのあと削っているんですけど、手応えのある仕事が入っています。さらっと描くんじゃなくて、自分のなかで実感が欲しいというか。

小勝 当然絵画なので平面なんですけど、色彩と凸凹した部分の組み合わせで、ひとつの面のなかに、奥に向かって吸い込まれていくような何層もの深さが生まれていますね。

須恵 自分でも吸い込まれたいというか、吸い込まれそうになるようにと思いついてやっています。

小勝 ニライカナイという題の絵もありますね。

須恵 ニライカナイは沖縄の東の海の彼方にあると言われる理想郷です。その先に、自分の母親がいるんじゃないか、魂が繋がっているんじゃないかと思いついて描きました。

小勝 須恵さんの発表は、個展と、他分野の作家たちとのグループ展、創画展と三つあるようですが、創画展に発表を続けているのは何故ですか？ 日本画的な手法を使っても団体展に所属しない現代作家も多いと思うんですけど、あえて創画展に出品を続ける理由はあるんですか？

須恵 まず、大きい作品を定期的に描くためのモチベーションを保つことがあります。格好良い、強い先生方が創画会から抜けられた時期に、わたしも迷ったときもあったんですけど、締切までに大きいのを描くというも自分に必要だなと思って。

小勝 創画展として会場で見られる場合と、こういう個展、ほかの現代アートの人たちとのグループ展と、同じ絵画であっても見え方は全然違ってくると思うんですけど。

須恵 違いますね。創画展は勉強の場っていう感じです。女子美出身の先輩、後輩もたくさんいるので、自分の絵を客観的に見る機会ですね。ほかのグループ展にも出んですけど、またちょっと違いますね。ほかの分野の作家とならべると、日本画というだけで目立つこともあるんですけど、同じ日本画がいっぱいあるなかで、自分がどう見えるのかなと……

小勝 現代の日本画の中での位置を確かめたいんですか。

須恵 そういうところはあります。創画会では、わたしは異色なのではと思っているんですが。凸凹している人もそれほどいないし、色がぱつと青い人もあまりいません。

小勝 自分の力量が一番発揮できる場所は？

須恵 個展です。自分の作品をならべて、誰とも比べられず、空間を自分の思い通りにできるというのは、一番望ましいです。でもグループ展や団体展で、場所が変わってどう見えてくるのかは勉強になります。団体展は、出している方たちとの生存確認じゃないですけど、今どうしているかと。日本画の作家同士で、励まし合いもあります。

小勝 女子美術大学はどうして選ばれたんですか？

須恵 日本画を選べる大学は少なく、関東だと東京藝大と女子美と多摩美、武蔵美だけで、一応、東京藝大を目ざしたんですけど、なかなか入れてもらえず、もう女子美でがんばろうと。

小勝 多摩美や武蔵美よりも女子美を選んだ理由は？

須恵 高校は共学だったんで、女性だけの環境で絵に没頭したいというか。男女のいざこざとかに気を紛らわせず……

小勝 女子美に入って、そうできた。

須恵 そうですね。すべてが美術に関係する勉強で、こんなに楽しい環境はないと。なんて幸せと思って、空いている時間はずっと制作していました。

小勝 最近読んだ『〈女流〉放談』という本で、1980年代にドイツ人の研究者が、円地文子さんから日本の女性作家にインタビューして、女性だけの環境で存分に力を発揮する期間が若い頃にあってもいいんじゃないかと聞いているんですね。わたしも女子大学に行ったんですけど、小学生の頃から絵を描くのが好きで、漫画研究会を立ち上げたんです。当時は少女漫画の全盛時代で。それで早稲田の研究会と交流すると、早稲田の女子学生は、力仕事は全部男にやらせて、しなした感じで(笑)。わたしたちは何でも自分でやらなきゃいけないから、共学の女子に違和感がある。大学院はわたしも早稲田に変わったんですけども。一定期間、女子だけの環境は面白いなって思います。

須恵 みんな強くなるんですかね(笑)。力仕事も自分たちでやるんですけど……男の方と言ったら先生くらいしかいないので、先生を使うわけにはいかない(笑)。

小勝 教える人が男性で教わる人が女性というのは、権力関係に結びつく、上下関係そのままという感じもしないではないですが、そんなことはなかったですか？

須恵 わたしが学生のときは3人が男性の先生で1人が女性だったんですが、女性の先生は女子美出身の方で、とにかく強かった印象ですね。

小勝 現在はどうですか？

須恵 男性2人女性2人で、女性2人は女子美の卒業生です。

小勝 出産されてから、しばらく大きな作品が描けない時期があったそうですが。

須恵 がんばろうと思っても、授乳で寝不足になって……男の人もおっぱい出ればいいのにな、と思った。そしたら公平なのに(笑)。夜の寝不足が一番こたえて。昼に子どもといっしょに寝ていましたが、起きているあいだに描いて、家事やって、と全部をこなすのは体力的に厳しくて、やむなくお休みして。

小勝 それが2~3年くらいですか？

須恵 そうですね、2年ちょっとくらい。

小勝 比較的短いですね。その後復帰できたというのは、結婚される前から旦那さんとはそういう約束だった？

須恵 わたしは絵描きでやるから結婚しないと聞いていたんですよ、親には。父親は人並みに結婚してくれとか言って。人並みってなんだ、とか思って(笑)。それで結婚の条件は、絵を続けることを容認してくれる人、と。

小勝 旦那さんは美術関係ではない？

須恵 美術が好きなサラリーマン。

小勝 一番良いですね(笑)

須恵 理想(笑)

小勝 ちゃんとお金を稼いでくれる(笑)

須恵 自分の生活は自分で稼げばいいと思っていたんですけど、制作を容認してくれる良い方が現れたので、結婚できた。

小勝 お子さんは大きくなって？

須恵 12歳です。小学校の中学年くらいからは、お母さん遅く帰ってきてもいいよ、と。むしろ家にいたら自由時間が少なくなるから、ゆっくり帰ってきて、と言われて。今は、土日は夫に任せきりで、心苦しいところもあったり、なかったり(笑)。つい制作に没頭してしまうので。

小勝 アトリエは別な場所には？

須恵 はい、6年前から。最初は自宅のマンションで描いていたんですけど、大きい作品は描けないし、作品はたまっていくので。日本画は床に敷いて絵具を塗って乾かすので、床面積が必要なんです。作品が増えたらどんどん狭くなって、もう限界という頃に、川口市の旧中学校を委託されたアート支援団体からアトリエを借りることになって。いまはまた、やっぱり別の学校の跡地にちょっと前に移って。4~5m四方のスペースがあるところ。作家ってスペースの問題が切実で。広い家だったらいいんですけど、なかなかそういう家もないので。

小勝 あとは切り替えもできますね。通勤しているみたいに。

須恵 家で描いてたときは、家事とか育児とか、生活音が入ってくると、集中力が切れちゃうので。自宅じゃないところを借りれば集中できます。

小勝 お母さんが亡くなる前に、介護はなかったんですか。

須恵 看病ですね。病院から退院したときに、義理のお母さんは近くに住んでいたんで、お手伝いとか。

小勝 その時期は制作に打ち込むことができなかった？

須恵 そうですね。ガンガンやるというより、抑えめに。展覧会のスケジュールを調整しながら……

小勝 そういう体験が須恵さんに蓄積されて、いまの青い世界に到ったと言えますよね。

須恵 久高島は母親に呼ばれたんじゃないかと思っていて。わたしは引きが強いところに呼ばれるんです。そこで描かされている、描かなきゃいけないという思いがあります。

小勝 女性に限らず男性でも、画家であり続けることが目標としてあるわけですが、それ以外の人生のできごと全部含めてひとりの作家を形づくっていくことになるんだと思いました。

須恵 義母にしても母にしても、子どもの成長とか、今回の個展を見てほしかった気持ちはありますけど……母が導いてくれた道なんだろうなと思っています。

小勝 女性画家の先達で、お好きな方はありますか？

須恵 女子美の先輩の三岸節子さんは心の師匠です。日本画をやっているのに日本画の作家じゃないんですけど(笑)。

小勝 三岸さんのどういうところが好きですか？

須恵 魂を絵に全部注ぎ込んでいる感じ。生きた、描いた、愛した、と……『花より花らしく』という本があるんですけど、本当に絵画に人生を捧げているところが好きです。

小勝 三岸節子さんも、たいへんな苦勞をしながら、自分が描きたい絵を探っていった方ですね。ただ、夫の三岸好太郎がつくった独立美術協会は、戦前は女性を会員にしなかったんです。それで新制作派協会という別の会に入った。それが後の創画会につながるという歴史があるんですね。でも現在の創画会会員の女性の割合は……

須恵 2割弱です。物故会員は数名だと思います。

小勝 今の時代にロールモデルとなるような女性作家は少ないんですね。がんばっている女性作家はたくさんいますけれども、社会的なシステムの問題もあり、十分な評価の機会がない。ぜひ、次の若い世代のモデルになるような活動を、須恵朋子さんに期待したいと思っています。(まとめ：岡村幸宣)